

渡辺克己著



第十七章●生石かいわい

第十七章 ● 生石かいわい

【写真】 明治の終りごろの

カンタン港

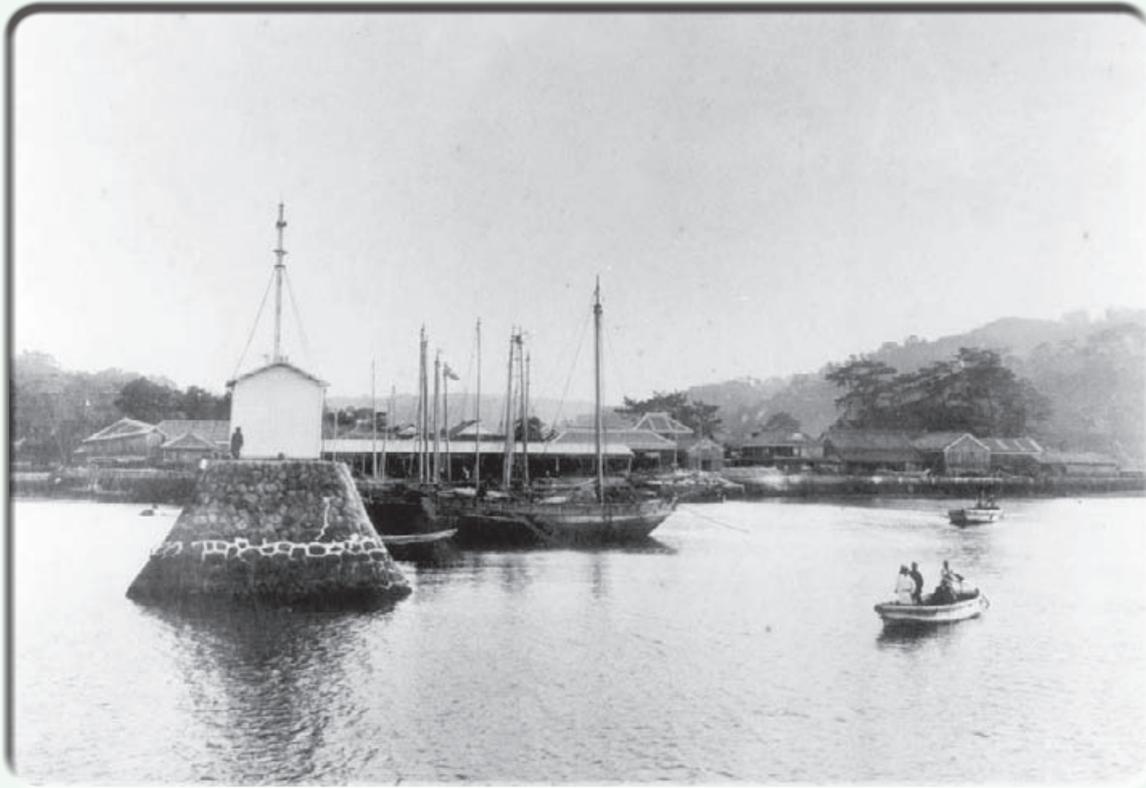
- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・石の神々 ・笠結島と古歌 ・カンタンの地名 ・紅灯エレジー ・浜ノ市の遊女屋 ・カンタン港完成 ・波止場の人々 ・一文人形と
マテ貝 ・カンタン港の
栄光 | <ul style="list-style-type: none"> ・もめた ・新大分港建設 ・ナンバンの味 ・柞原さまご難儀 ・望郷の
ジャビセン ・忠直卿の墓 ・お蘭さま |
|--|---|

奥付け／デジタルブックについて



発行に当たって

▽この電子ブック「大分今昔」は昭和 37（1962）年 11 月から翌 38（1963）年 12 月末まで、1 年 2 カ月にわたり大分合同新聞に 295 回連載され、連載から 20 年後の昭和 58（1983）年大分合同新聞文化センターで書籍として出版されたものを、電子ブックとして再編集したものです。したがって、文中の「現在」とか「いま」というのは昭和 37、8（1962～63）年当時のことです。▽使われている町名も、その後、街区制の変更によって連載当時とは変わっており、その場所を知る手がかりになる建物も、いまでは移転したり、なくなったりしているものがあります。このため、おもなものは各章の終わりに「注」として、昭和 58（1983）年現在の町名、場所を説明し、わかりやすくしています。



明治の終りごろのカンタン港

石の神々

生石（いくし）という地名は、何かいわくがありそうだと思っ
ていたら、案のじよう「生きている」と信じられていた大石が
かつてあったのだ。

いま西大分駅構内となっている場所に畳何枚敷きとかいわれ
る巨石が地上に突き出ていた。これが生きている石と信じられ、
里人の信仰を集めていたもので、石の周囲には玉がきをめぐら
せ、石にはしめなわを張り「生石大明神」と呼んでいた。

こどもが腹痛を起こすと「生石さまの上にも上がったん
じゃないか」と、おばあさんは心配をしたものだ。

「昔、生石さまをのけようとしてノミを入れたら、そこから
血が吹き出たことがあったんだよ」と、こどもたちは、年寄り
からたびたび聞かされていた。だから、こどもたちも生石さま
をおそれ、うやまつて近づかないようにしていた。

年に一度、旧暦の五月五日が、この生石大明神のお祭りで、
村の人々が集まって、あたりを清め、しめなわも新しくかけか
えて、その前でお神楽を奉納した。

この生石大明神も文明開化には抵抗できなかつた。鉄道が北
からのびてきて、ここに停車場ができることになつたので消さ
れてしまったのである。

破壊工事の前にお祭りをして神霊をしずめたせいとか、ダイナ
マイトをしかけ、こなごなにされて取り払われたが、別に血も
出なかつたし、腹痛を起こした者もなかつた。その一部を興玉
神社境内に移したのが、現在の「生石大明神」だとされている

が、どういつごうか、現在のご神体の石は、ぜんぜん別もので、栗迫というところから運んだ石だそうである。

もう一つ、カンタンの小島の手前のところにも大きな石があった。この巨石は、カンタン旧港ができるときの埋め立てまでは海中に高く突き出ていたものである。その後は、カンタン遊廓内でじゃまもの扱いを受けていたが、大正初年ごろついに爆破して取り除いた。そのあとに松石楼という貸し席が建ったが遊女と客の心中事件などでケチがついてうまくゆかなかったそうである。

この巨石は王子神社のご神体が海から上がって、まずこの巨石をふまえて陸に上がり、駄ノ原に行かれたという伝説のあった石で、王子神社の祭礼には、ここまでご神体のお渡りがあり石上で一夜を明かして帰るのがならわしだった。

そんないわく付きの巨石を破壊したのだから、タタリがあるはずだと、生石の古老が話してくれた。

笠結島と古歌

カンタンの旧遊廓の西のはずれ、民家の屋根に接していまは見るかげもない小さな草山がある。あれが有名な笠結島である。

明治三十五年の「大分県案内」にこう記してある。

「市街の西端にあたり海中に崛起せる一小丘あり。古松疎生しすこぶる雅致に富めり。音に聞く笠結島はすなわちこれなりという。一説に旧笠結島と指称するもの三個所あり、慶長の災後、ひとりこの一島をあますのみ……」

このかたちのよい古松は昭和の初めごろまであったそうだが、保護する者がいないので枯れてしまった。

府内城主早川主馬首が笠結島をながめてうたったという詩がある。現代調になおすところなる。

どこの漁師が捨てたのか

波打ちぎわに笠ひとつ

沖行く旅の船人に

着せてやったらうれしかる

貝原益軒が元禄七年（一六九四年）に府内に来遊したさいの見聞を記した「豊国紀行」にも笠結島のことを、四極山（高崎山）の紹介に続いて「生石のはまのそばなる小島を笠縫の島という。これも万葉三巻によめり。一説には豊前にありという。笠結の島ともよめり」と書いている。その万葉の歌は

柴津山打越え見れば笠結の島漕ぎかへる棚なし小舟

柴津山は四極山のこと。このほか、笠結島をうたった古歌をあげる

（新後選） 笠ゆひの島たちかくす朝霧に

いや漕ぎさかる棚なし小舟 土御門院御製

（名寄） 旅人はみのうちはらい夕暮の

雨にやどかる笠結のさと

（雲玉集） 春のきる霞の袖の笠結の

島もかくれて行く舟もなし

これらの古歌に紹介された笠結島は、貝原益軒も「一説に豊前にありという」と書いているように、豊後の笠結島ではなからう、笠結島なんてのは豊後に限ったものではないのだから、

という疑いが研究家の間にあって、はっきりと豊後のものにして
 てくれない。

かまうことはない、こちらは豊後のものにして、笠結島をじゃ
 んじゃん観光に売り出せばよかりそうなものだが、みんな遠慮
 している。遠慮しているうちに遊廓の陸続きにされ、汚され、
 ついに坊主山になって、まったく島の価値がなくなってしまう
 た。明治、大正年代に、浜の市の見物に行つて、笠結島の古松
 の下で弁当を開いたなつかしい思い出を持つ人は、いまもたく
 さんあるはずだ。そのころのおもかげは、もうまったくくないの
 である。

あの島の東側のガケ下に、いつごろからまつたものか、生
 目神社という小さなほこらがある。きいてみたら耳の神さまだ
 そうで、耳の遠い人は火吹き竹を供えて祈ると効験があるそう
 だ。ここにだれが書いたものか歌が記してあった。

かげ清くてらす生目の水ががみ

末の世までもくもらざりけり



生目さま (挿絵：田中 昇)

カンタンの地名

カンタンのカンには「草カンムリに函」、タンは菖。このカンタンという地名はおそらく日本中を捜しても、ほかにはないだろう。字づらからして、とうていなじめない字だし、だいたい日本語ではない。ただ、発音してひびきがいいことから、人々に記憶され根をおろしたのだろう。

「かん菖」を辞書で見ると「ハスの花、またはハスの花の開きかかっているものをいう」とある。

大友時代に、臼杵に住んでいた阮林という明（中国）人が府内をおとずれたさい、生石の浜あたりに立つて海をながめ、国東半島と佐賀関半島に包まれた湾のかたち、ハスの花に似ていると感嘆して、そう名付けたものだと言われている。阮林さん、学のあるところをみせたわけだが、おせっかいな話だ。

盧生という青年が、あるとき道士から、栄華が意のごとくなるといふまくらを借り、しだいに立身出世をして栄華をきわめるが、さめてみると、キビの飯がまだ煮えきっていない、ほんのつかの間の夢だったという「カンタンの夢のまくら」のカンタンは「邯鄲」と書く。これは、中国河北省にある地名で「かん菖」とは縁もゆかりもない。

しかし、遊廓のある土地であったので、どうも「カンタンの夢のまくら」が連想されていけない。

ところで、カンタンは、現在は遊廓のあった一画と旧築港あたりの限られた土地の名となっているが昔はもつと広く、春日浦あたりから向こうを呼んでいたらしいという。

「豊後国志」という古い本によると「かん苞」は「…また海浜に春日祠があり、そのかたわらに神宮という寺があつて社務をにぎっている。故にあるいは神宮寺浦とも呼び船舶がはいるところである。天文十年七月にポルトガル国の大きな船が一隻、豊の神宮寺浦に到着したというのはここである」という意味のことが書いてある。また「神宮寺浦の項」には「いまの春日浦地方は、またの名をかん苞港という。往昔西蕃の諸船がにぎわつた」（原漢文）とある。

これらからみると、カンタンの呼び名は春日浦（神宮寺浦）をもふくんでいたわけだし、逆にいうと大友宗麟が海外貿易の場とし、なんばん文化が上陸した神宮寺浦の港というのは、いまのカンタン港付近ではなかったかという見方もなりたつわけで、昭和三十年版の大分市史にも、カンタンは「春日浦地方と、いわゆる神宮寺浦をふくめて、ばく然とした地方を意味し、大友の開港場には明らかにカンタン港をあてている点も興味深い」と、大いに研究の必要をほのめかしている。

地勢的にも、現在のカンタン付近が別府湾の沈降海岸の一部をなしているため、大船がはいるのに好適の場所なのだそうだ。

紅灯エレジー

カンタンの遊廓ができたのは明治十七年に築港（旧港）が完成してからのちのことだから、昭和三十三年に売春禁止で消えるまで、七十年そこそこの短い歴史だった。

築港ができるまでは、いまの電車道路から数間先が波打ちぎ

わで、磯に並んだ形のいい松が潮風に鳴っていたのだ。

むろん電車道路付近は田畑が奥から延びてきて、明治中期に開通した別大道路が磯づたいに白木方面につづいていたにすぎない。その磯から手の届きそうな海上に笠結島がぼっかり浮かんで、すそを白い波頭がかんでいた。

築港工事は、この美しい風景をつぶしてしまった。埋め立て地には海運倉庫が建ち並び、船問屋が進出してきた。そして、その間を縫って、船員や出船を待つ客を相手にする売春宿が根をおろしてきた。カンタンの夜の花の歴史は、こうして幕をあけたのである。貸席では幸松楼（のちの金栄楼）、花月、中川楼、港屋などが最も古く、松竹楼、かん（草かんむりに函）屋楼、松栄楼などがこれに続いた。また水野旅館も堀川から支店を出していたが、これは長く続かず、貸席に転じて鹿島楼から入船楼と名を変えていった。

第一次世界大戦の好況で遊廓街は大いに栄え、このときからカンタン遊廓の基礎が固まったのだが、第二次大戦の末期にはほとんど開店休業の状態に追い込まれ、従業婦は国元に帰ったり、中には前線の将兵の慰安婦となって大陸や南方に出かけていったものもあった。戦後息を吹き返して、市内に散在した「赤ちようちん」もここに寄せ集められ、かつての繁栄の夢を追ったが、時代は変わっていた。夜の世界は、別府の紅灯に奪い去られる運命にあった。

消長はあったが、カンタン遊廓の貸席は大正年代以後二十四、五軒から三十軒、昭和三十三年に消え去るころは大小とりまぜ三十軒近くあった。

いま、もしもかつてのとう（蕩）児が、なまめいた昔のおもかげをたずねてあの町をさまよったら、その、うらぶれた姿に涙ぐむだろう。うすよこれた白壁には「貸席」の文字が消え残り、軒には「○○楼」の店名がゆがんだままへばりついている。玄關上の装飾も花やかであった昔をなつかしむように、色ははげ、こわれかかったまま存在している。昔をしのぶものがこのように取り残されていればいるほど、女の厚化粧がはげたよりも、もっとさくばくとしても悲しい。

ここのちまたの陰で、幾百人の女が泣いたことだろうか。そして幾百人の男どもの悪がかもしだされたことだろうか。

現在は貸間業や旅館に、ほとんどの店が転業しているが、そんなことでこの町並みが永続できるはずはない。今後どのように変化してゆくことか…。

浜ノ市の遊女屋

カンタン遊廓は築港とともに始まったのだが、その下地は浜ノ市の歴史の中にはぐくまれていた。

浜ノ市は、府内宿老の書いた「浜市略記」によると、府内城主日根野吉明が、杵原八幡の放生会にお参りする人の多いのを見て「大市の境地なり、新市をおこせしかば御国の商賈、船脚馬蹄の労をからず居ながら市店を飾り、諸国の商船も世渡りのよすがなりてんをかんがみ」寛永十三年（一六三六年）に創設したもので、その繁栄のために、浜ノ市の期間中遊女屋の店を張ることを許したのだった。

府内には常設の遊女屋がなかったのか、それともほかにわけがあったのか、浜ノ市に店を出す遊女屋はよそからきたものばかりだった。天保十四年（一八四三年）の記録には、

別府岩田屋安次郎女房かかえ遊女、下男、下女しめて二十四人。浜脇柳屋七郎兵衛女房かかえ遊女、下男、下女しめて二十四人が最も多く、乙津藤屋政吉女房、御料高田（高松のこらしい）佐伯屋清九郎女房が、それぞれ遊女四、五人を引きつれて店を出している。そのほか、これらの遊女屋が別に芸子を、多いところは十四人、少ないところで二人ぐらい連れてきている。また大阪北の新地から数軒の芸子屋が、芸子や舞子を数人ずつ引き連れて来るといふにぎやかさだ。

文政二年（一八一九年）には浜ノ市の景気をおおろうというので、これらの芸子、遊女それに芝居の役者が総出で、シャミ太鼓のはやしもにぎやかに市中を練り歩いて大評判になったという。

これらの店は、短期間の商売だから、にわか造りの小屋で客をとったわけだが、浜ノ市の遊女といえば有名だったとみえ、近松門左衛門の「百合若大臣野守鏡」に、府内の者で、父から勘当をうけている悪文次秀景の内縁の妻松が枝が摂津の有馬温泉で湯女となっているくだりで「大湯女小湯女多き中に、分けて名高き松が枝とて、元の根ざしは豊後の国、浜の市の遊君なりしが…」とある。浜脇、あるいは乙津の遊君なりしが…というより通りがよかつたのだろう。

この遊女屋や芸子屋は、商売が商売だから弊害も多かった。府内藩士のせがれと遊女の、心中事件が起こったりしている。そ

れで幾度も赤線禁止をやっているが禁止をすると浜ノ市がひどくさびれるので、また許可するということを繰り返している。これらの店は、むろん現在のカントンではない。祓川から東の方の畑や原野を藩で地割りして各種の店を出させていたのだから、その中の一画である。

とところで、明治の末ごろ、カントン遊廓を大いに宣伝しようと関係者が頭をひねって、オイラン道中をやったことがあった。熊本二本木遊廓から本場のオイランを招き、長野善五郎さんの別荘（現在の豊山荘）を開放して、オイラン部屋にしつらえ、ここからカントンの道路にかけて、数人のオイランが八文字を踏んだものだ。大分の町の鼻下長連が大いに喜んだことはいまでもない。

戦後そのままねをして、役者を雇ってオイラン道中のまねごとをしたこともあったが、とてもチャチなもので話題にもならなかった。



オイラン道中

カンタン港完成

浜ノ市を盛んにするために創始者の日根野吉明をはじめ歴代の府内城主は、いろいろと保護対策をやっているが、それは浜ノ市期間中のことで、古い文献にみえている「西国、北国の廻船の輩、蟻の如くに聚りて、賈買限り無き事也。人は顧る事あたはず、車は巡らすに及ばずと云ふにひとし……」といったにぎやかさも、市が終われば潮が引いたように閑寂な町はずれの農村に帰ったのだ。

だから、浜ノ市のために、生石かいわいが特別に繁栄し、人家もふえたということはなさそうだ。

生石かいわいが町として活況を呈しはじめたのは、やはり明治十七年に築港（旧港）が完成し、堀川港の海上運輸がカンタンに移ってきてからだ。

しかし、それまでは、カンタン付近は港の用をなさなかったかというところではなく、祓川の川口が船舶まりで、浜ノ市のさいには大小の船が集まって非常にぎわいだった。とくに大友時代に外国船が盛んにやってきた神宮寺浦の停泊地は、このあたりの沖ではなかったかとさえいわれているほどだ。つまり港としての素地はじゅうぶんを持っていたのである。さらえても、さらえても泥に埋まる堀川港に見切りをつけたとき、カンタンに移転を考えることは当然のなりゆきであったわけだ。

大分町の有力者八十二人が願主となって「築港の儀に付御願」という願書を県大書記官小原正朝に出したのが明治十二年。町民の出資で「港会所」という会社を設けて工事をし、港銭をとつ

て工費を償還しようという計画だった。

それによると、西洋形船が一カ年に百八十隻入港の見込みで一隻につき十五銭、日本形船は五十石以上が一カ年に百六十隻入港の見込みで一石当たり二銭、五十石未満二十石以上は年五百隻で一隻につき三十五銭、二十石未満は年二百六十隻で一隻につき五銭を取り立て、一年の港益金千三百六十六円六十八銭とソロバンをはじいている。

十三年十一月に着工したが、風波のために石がきが組めず、一年の予定が三年もおくれて、十七年の春やっと完成した。石がきの石は高崎山から切り出したのだが、そのころ通じたばかりの別大道路に、切り出す石がころがり落ちて、道路をふさいだり、通行中の馬車や人にぶつかかることもたびたびというありさま。そのため内務省から嚴重な取り締まりを受け、一時は石を切り出せなくなるなど、世話人はずいぶん苦勞をしたという。完成後は、港会所を大分港株式会社に改め、初代社長に二十三銀行の重役小林師善さんを迎えた。

その年に大阪商船の五十人乗り外輪蒸汽船が波止場沖にイカリをおろすようになった。汽船は、港内が浅いのではないのだった。それでハシケで乗客を送り迎えしなければならなかった。それでも蒸汽船が着くようになったのは交通のたいへんなスピード化だ。「大阪まで、たったの四日間で着くそうな」とみんな感心した。

船賃は大阪まで二円九十九銭。もちろんまかない付きである。大正初年にはもっと速度が上がって、きょうの夕方乗れば、あすの夕方には大阪に着いた。

波止場の人々

カンタン港築造の発起人となった大分町の有志八十二人のおもな顔ぶれは次のような人々である。

呉服商三塚乙人。この人は祓川に石橋をかけたり吉兆原の開墾を応援したり、仏崎のトンネルをひらくなど、大分町の発展のために労を惜しまない人だった。また俳人としても名をとどめており、この人が建立した芭蕉句碑は市内に二、三残っている。カンタンに建碑したものは、もと花月の中庭にいまもある。碑には「春も漸けしきとのふ月とむめ」とある。カンタン港完成を祝って建てたものである。港の構築には、港会所の頭取に推されて、この人が最も苦勞している。

このほか、葉種商讃岐屋中尾喜平。ゆずねりの菓子商古後精作。みそ、しょうゆ商三国屋守田大平。呉服商児玉新平。大分町の代言人の草分けで、のちに大分市長となった後藤喜太郎。しょうゆ商辛島哲次郎、回漕店を開いた浅田駒太郎。本屋山川正三郎。乾物商星野藤八。金物の播磨屋野内四郎七。たばこ商桑野藤七、酢屋幸松雄三郎といった人々で、当時の大分町の一流人である。

大分港株式会社初の社長になった小林師善さんは東京出身の人で、若くして太政官の役人として日田県庁に赴任し大いに羽振りがよかったことがある。当時日田ではやった歌に「日田で太政官、豆田でお雪で、隈でお政」という文句があった。豆田と隈では美人のほまれが高いお雪、お政のふたりがいるというわけだが、このお政さんが小林師善さんの夫人となり、たいへんな評判となったそうだ。その後太政官廃止とともに大分県

庁入りして金融方面の役人をやり、その関係で二十三銀行創立のさい重役となった。カンタン港との関係は築造のさい二十三銀行が九千余円の貸し出しをしていたので、大分港株式会社として出発するさい二十三銀行が師善さんを社長に送りこんだのである。岸壁近くには二十三銀行や大分銀行などの米穀倉庫が建ち、西川甚五郎商店などの青筵倉庫もきそい建った。波止場の素倉（すぐら）には船に積みこむ米俵や青表が山をなし、沖の汽船と連絡する通い船に、仲仕が掛け声もにぎやかに運び込むのだった。一方では陸揚げされる砂糖、肥料、呉服類のこん包が岸壁に満ちた。

これらの通い船を縫って郵便物を運ぶ郵便チヨロが波止場と汽船の間を往復した。ちよつと波のある日は、小さなハシケは、あれよあれよという間に春日浦の沖あたりまで流されることもあった。客船が出航するときは船上で楽隊がブカブカドンドン奏樂するにぎやかさ。大阪商船と尼ヶ崎汽船が競争し、船賃のダンピングをやったこともあるほどだから、楽隊も人気取りのサービスだったのだろう。

乗船切符は問屋で売っていた。おもな汽船問屋は藤丸、米嘉水野、桜屋などだった。回漕店は浅田、松本、岩田、公受、村山などがあつた。浅田、村山はいまもやっている。

一文人形とマテ貝

明治時代の生石かいわいは、カンタン港ができて活気がでてきたとはいえ、まだまだ牧歌的な風景だった。

いまの映画館付近に六軒の人家があつて、六軒町と呼んでいた。ここが生石の町のはずれで、それから西は田畑が広がり、そのくろを別大道路が一本、祓川橋を渡つて走り、埋め立て地のカンタン港にもつながっていた。つまり、カンタン港の間屋や倉庫、貸席などは、町からずつと離れた新開地としての一面をなしていたわけで、当時の紹介文を借りると「港頭の戸数多からずといえども貸席等あり、すこぶるいんしん（殷賑）をきわめ、糸竹の声絶ゆることなし」といったありさまを呈した特別の地帯を形づくっていたのだ。

生石町には、多賀、木本、阿部姓の家が多い。これらの姓の家がもともあの地帯に根をはって農業をいとなんでいたのである。往還に面したこれらの家は、浜ノ市になると表側を出店に貸すのでにわか商店に早変わりしていたが、中には自分で店を開くものもあつた。いまの生石郵便局のすじ向かいにある阿部歯科医院の屋敷は、先祖が浜ノ市名物の一文人形を作っていたそうで、いまも古い人はあの家を人形屋と呼んでいる。

藩政時代、浜ノ市期間中は、いま浜ノ市町名になっている一帯に藩役人のさしずで小屋割りをして大きな小屋掛け商店街が出現したのだ。その他の民家も、何か店を出さなければ、浜ノ市に協力しないというわけで、おとがめがあつたらしい。それで、前記のように軒先を出店に貸したり、何か品物を並べてあきないをさせられたのだった。その民家の中に、一文人形を売る家も数軒あつた。人形の顔を彫った型板に粘土を指で押しこんで作り、泥絵の具をぬった自家製の首人形を、ワラツトにさし、軒先に下げて売るのである。阿部さんの先祖もその一軒だっ

たのだろう。大正初年ごろまで作っていたようだ。

あの素朴な愛すべき一文人形は、現在、郷土民芸品収集家が数個入手して保存しているだけだ。戦後浜ノ市に一文人形を再現したいと有志がいろいろ研究したらしいが、昔のものは再び生まれなかった。

祓川から東の方は、いまの電車通りあたりが波打ちぎわで、潮が引くと、あの付近は、マテ貝がどだいたくさんとれた。

こどもたちは、そのマテ貝とりに夢中になったものだった。長い針金の先を、ちよつと曲げたものを手に持って、マテ貝の穴を見つけると、さつとその針金を差し込んだ。貝はその針金にひっかけられてあがつてくるのである。

大正四年に完成した新大分港の出現とともに、あの愉快な貝掘りも見られなくなった。

カンタン港の栄光

明治四十年十一月五日は、カンタン港にとって記念すべき栄光の日だった。

皇太子さま（大正天皇）が大分県訪問の第一歩を、この港頭に印せられたのである。

瓜生橋の西たもとに「奉迎」の大アーチが建ち、橋の東たもとから生石、勢家、堀川、そしてご宿舎の県庁まで、およそ三キロのご通路には、二十万人と数えられた奉迎拝観者が並んでお待ちした。

「あまさかる大分県の山河が空前の光栄に輝くべき時は来た

りぬ。数月以来八十万の県民が狂せんばかりの熱誠をささげて天津日嗣のおほみこを迎え奉るべく、とりどりの準備に心をくだきて待ちに待ちたるその日は到れり…」

という書き出しで、新聞記者がカンタン港ご上陸のもようを感激をこめて書いている。

当日は、あいにく前夜からの雨が、小やみなく降りつづいていた。初冬の雨は冷たく、着物のえりもとから、冷たい風がはいこむような寒さが、沿道に立ちつくす人々を包んでいた。おまけに暗いうちから並んでいるのだから疲れも手伝って、からだはしびれたようになっていた。午前六時を、わずかに回ったころ、ほのぼのと明けてきた海上はるか、水平線に黒煙をみとめた。

「夜をこめ雨を冒して春日浦わに立ちつくせる数十万の拝観者は、万口一斉、すは御着ぞと心からなる歓喜の情にひとわりどよめき渡るほどもあらせず、刻一刻艦形は、近く大きく水平線上に現はれて…」

先導艦「対馬」をまっ先に「鹿島」「香取」「出雲」「磐手」「常磐」「浅間」の七艦が、雨にけむる海上に重たく黒煙をなびかせ、単てい（梯）陣のまま、カンタン港からおよそ二千メートルの海上に停泊した。時に午前六時五十分。おりから二十一発の花火が雨雲をつんざいて打ち上げられ、お着きを町民に知らせた。皇太子さまは、すぐにご上陸にならず、お召し艦「香取」の艦上で、お迎えにあがった千葉知事、十二師団長代理足立参謀長、永田警察部長、大給近孝子爵のうち、知事と参謀長を招いてご昼食をとられた。さらにお慰みにと、午後一時からお召し

艦の近くで、佐賀関の漁夫五百四十人が、そろいのいでたちで漁船競争を催したのをご覧になり、ようやく午後三時にカンタン岸壁にお立ちになった。

そのころ、ようやく雨はあがったが、朝暗いうちから雨の中に立っていた奉迎の人々は、片手にカサ片手ににぎり飯を食つての、十時間近い立ちんぼうだから、ずいぶん待ちくたびれたにちがいない。

東郷大将と岩倉枢密顧問官がお供をしてきたが、日露戦争で武勲輝く東郷さんの人気はたいへんで、宿舎を提供したい町の有力者が多くて、係りの人は選ぶのに困ったそうだ。

東郷さんは白銀町の後藤喜太郎さんの家、岩倉さんは栄町の播磨屋に泊まった。こういうえらい人をお泊めしたのだから便所は清潔にと、あれこれくふうしたすえ、つぼの中にソバガラを入れておいたという。これだと一発ごとにソバがらに埋まって姿を消してしまう。

皇太子さまは大分町に二泊。三日目に別府にお立ち寄りになり、その日の午後五時カンタン沖を出発された。

もめた新大分港建設

カンタン港は、大分の町の海の玄関口として、その重要性は各方面に大いに認識されてきたが、明治二十六年秋の台風で、突堤の石がきが無残にくずれて大修築をするなど、大分港株式会社の内容は火の車だった。

そこで、これを県営に移して、汽船も岸壁に横つけできる完

全な築港へ改造しようという構想が大分町の有志によって描かれはじめた。

その手始めとして、西大分町が大分町に合併された二年後の明治四十二年に、カンタン港を大分町が買収することになった。のちに大分市長となった三浦数平、高田保、豊州新報社長長野松太郎、大分新聞社長大津淳三、のちに大分市議会議長となった河野卓治、町会議員小野幸平、首藤清九郎の七氏が交渉委員として、大分港会社にのりこんでいった。その結果、三万円で手打ちができ、町の寄付金十一万三千円を集めて、これを合わせて大分町から県に寄付した。これで、新大分港建設の基礎がたけができた。

もちろん新しい築港が十一万円やそこらでできるわけのものではない。これは県が工事にかかる誘い水のようなものだ。

県は、その翌年、大分築港工事予算として百四十万余円を議会に提案した。ところが思いがけない障害がたちふさがって千葉貞幹知事の頭をかかえさせてしまった。

下毛、宇佐、南北両海部四郡から出ている県議が猛反対の火の手をあげたのだった。中でも下毛の平田吉胤、北海部の片岡清松、南海部の清田良作などが反対の先ぼうだった。

「港は大分だけにあるのではない。豊前海にも、豊後水道にも良港はいくらでもある。持てあましているような大分港に巨額の県費をつぎ込む必要がどこにあるか」というわけだ。大局を無視した横車といえはそのとおりだが、当時の大分町は、翌年市制施行が約束されているとはいっても、県北や県南の郷土意識の強い人々からみれば「たかが県庁所在地というだけの町

じゃないか。わが郡の港町とどれだけ違うか」という気概がある。

議会は佐藤孫三郎議長（直入郡）もお手上げの大混乱となり、千葉知事は水之江政友会、山口憲政会両支部長や長野二十三銀行頭取にあっせんを依頼するやら、前議長の木下淳太郎議員（宇佐郡）がなだめ役となるなど、いきりたつ反対者を説伏してようやく可決のはこびとなった。

明治四十四年に五カ年継続事業として新大分築港工事に着手。台風などにも襲われず、大正四年五月に完成、赤白灯台が大分市の発展を祝福するようにまたたき始めた。この大工事のさいはいをふるったのは武藤県土木課長。

この大分築港工事事務所の建て物が、そのまま関西汽船の事務所となつていまも使われている。

築港完成後、いまの理容美容学校や角山商店のあたりは、形のいい大きな石などを並べ樹木を植えてちよつとした港公園となつていたが、間もなく取り除いた。

ナンバンの味

明治も末ごろには、生石の町も一応町らしい姿を形づくっていた。米俵や青表を積んだ荷馬車が、りくぞくとカンタン港に続き、また荷揚げされた各種の貨物が市中に運び込まれる。それらの往来が終日絶えることがなかった。そしてその間を縫つて別大電車がけたたましく走り抜け、例のチンチンの警鐘をふりまいた。

汽船の乗降客や船員が、買い物をする姿も、ちらほらと町を
いどどつたし、煮売り屋（飲食店）も、つぎつぎと建って、馬
車を引く人々の足をとめ、あるいは汽船の乗降客や船員にいこ
いの場を提供した。煮売り屋の中では祓川の橋のたもとにでき
た「橋の本屋」は大きい店だった。座敷に上がると海が一望の
うちに見渡せ、沖に停泊した汽船に積み荷をする掛け声も聞こ
えてくるようだ。それに、この座敷で食べるナンバン（うどん
料理）はうまかった。

浜ノ市の見物にきて、疲れた足を「橋の本屋」で休め、熱い
ナンバンをすすった思い出を持つ明治生まれの人は多いはず
だ。

ナンバンといえば、柞原八幡さまの境内にあつた茶店のナン
バンも舌の記憶に残っている。あのころは柞原八幡さまへのお
参りは、現在のガードをくぐって祓川の西側の岸づたいに行く
道ではなかった。いまの西大分駅のところから、奥の方に向け
て広い道があり、それは山沿いの森や野つ原を抜け、いまの富
士紡の中を通って参道につながっていたのである。富士紡のい
まの表門付近に大きな灯ろうが道の両側に建っていたそうだ。
それをはいると参道というわけだ。それからずっと山道を登っ
て、行きついた境内の巨木の下のレストラン。参拝をすませてひと息
いれる縁台はこよなく慕わしいものだった。

そして、すき腹にすすりこむ熱いナンバンの味…。

柞原八幡さまは、いまでこそ正月かお祭りのときのほかは、
すっかり忘れられているが、明治、大正年代は、大分の町の人々
にとっては、かつこうの行楽地で、身近な親しみを持っていた。

家族連れで春のピクニック、秋は裏山のキノコ狩り。あるいは歌人俳人の吟行。師範生たちがストライキで立てこもる場所までが、たいていこの境内だったのも、ひごろ親しんでいた場所だったからだ。

現在の大大市民は、近くにあのような行楽地があることを忘れていた。信仰心はともかくとして、緑におおわれた柞原さまの境内は、いまま昔のままのなつかしさをたたえているのに。

柞原さまご難儀

「浜ノ市」が柞原八幡さまの崇敬から起こっていることは、誰でも知っている。このお社は古くから豊後の国の神社信仰の中心として公武の尊崇を集め、広大な宮領を支配していた。そして明治六年には県社、大正三年には国幣小社に列せられ、官選の神職が赴任するなど、高い社格の上に安座していた。

戦後神社の権威が失墜してから、過去の社格なんてものは通用しなくなった。そのことは宇佐八幡さまをはじめその他の神社も同じことで、収入源は、お参りの人のサイ銭と、氏子の寄進ぐらいのものとおちぶれた。数年前に社殿の復興費にと境内の大杉が売りに出て話題となったり、昨年のおくぐりには、みこしのかつぎ手がいなくて、トラックでお旅所にお渡りになって、年寄りたちを嘆かせたりした。

神殿は内陣と外陣に分かれ、五間五面の優美な八幡造りで、すべて古式にのっとっている。そして本殿と回廊の間に白殿・渡殿があり、回廊はさらに左右に延長されて、東西の二門がこ



日暮し門

れに接している。参拝に行った人は、どこでおがんだらいいか、ちよつととまどうような、こみいった宮居のたたずまい。

石段を登ったところにある門は「南大門」または「日暮し門」といわれるもの。これを最初造営したのは府内城主竹中重義で各種の彫刻は見事なものだったらしい。これも長い歳月で朽ちたので、慶応三年に広瀬久兵衛、中尾喜平、幸松雄三郎といったような有力者が中心となつて改築の寄付金を集めた。この寄進には大阪、京都方面の財産家からもばく大な金がとどいたというから当時の柞原さまへの尊崇のほどがうかがえるというものだ。

落成したのは明治三年。そのできばえが大分の町の人々の評判となり、見物人がひきもきらなかつたらしく、狂歌師がこんな落首をものしている。

「この門をなんだいもんと誰がいうた、その日ぐらしのものがいうらん」

南大門と日暮し門をうまくおりこんで軽くざれている。

このように古い歴史をもったりつばな社殿に、国宝指定の社宝も数点あるのだが、火災防止のてだてが、まったくなくなっていないということ、重要文化財管理の責任者である大分県教育委員会は心配をしているようだ。消火器一つ買うにもお金がいる。まして防火水そう工事など、現在の火の車の経営内容では、とてもできっこないらしい。

墮落かもしれないが観光と行楽の地としてうんと客を集めてもうける商策を考えなければ、当節神社の歴史は守れない。

望郷のジャビセン

富士紡の前身の大分紡績会社できたのは明治四十五年、操業を開始したのは大正二年だった。

長野善五郎（初代社長）、高木正彦、麻生観八、高田保、中尾儀三郎といったような人たちが発起人となって、資本金百万円で創立し、大正六年には資本金を三百万円にふやしている。当時の三百万円といえたいしたものだ。現在の金にすれば三十億円を越えるだろう。県外から誘致しないで地場資本をもって設立し、明治年代に中津に進出していた鐘淵紡績と並んで、大分県の二大産業といわれたのだから、そのころの大分町の実業家のキモツタマは大きかった。

敷き地総面積三万七千六百余坪、第一工場、第二工場合わせて六千余坪、そのほか事務所、倉庫、寄宿舎、病院、食堂、変圧所、精米所など五十余の建て物を持ち第一工場、第二工場と

も三万二千錘（すい）で、規模としては当時九州第一の大きさを持つといわれた。

それに工場内のそうじには、すでに真空除じん機を使い、工場内の空気の転換に、通風機を用いていた。女工哀史の舞台となった大正年代のわが国の紡績工場の中に、これほどの設備を持ったものは少なかったというから、大分の町に、大分の町人の手によって、わが国近代産業の先端をゆくものを作りあげたわけである。

この工場設立と鉄路が伸びてきて西大分駅ができたために、柞原八幡さまにお参りする道が整備され現在のように橋を渡って向こう側から、ガードをくぐって行く道が作られた。

一ノ坂の一ノ鳥居付近に散在していた句碑は、そのとき興玉社境内に寄せ集めた。もともと、参道の「新道」が作られたのは明治二十五、六年ごろである。

そのころあのガード付近から現在の富士紡付近一帯はたんぼで、稲の実るころは、石油カンをたたいて「ホーホー」と鳥を追う人の姿のほか水車小屋がぼつんと一軒建っているだけだった。祓川から取り入れた水でひねもす回っている水車の、のどかな音を消して、汽車が走り、紡績会社の機械音が、あのあたりの夜明けを告げたのである。

女工や男工は、最初、沖縄からたくさん連れてきた。カスリの着物に帯を前で結び、髪を高く巻きあげた、いまでは沖縄で観光用風俗化している、あの服装の娘さんが、生石かいわいをよくうろついていた。

男工の一部は工場外に間借り生活をしていたようだ。へやだ

け借りて、食事は会社から支給されている「飯券」というのを
使って、工場の食堂でとっていた。

この男工が間借りのへやで、ジャビセンをひく音がよく聞こ
えた。故郷を離れるとき、かたみにと持ち出したジャビセンが
この人たちにとっては唯一の慰めだったのだろう。望郷の思い
をこめてつまびく哀切の音色は、生石の町の人々の胸を打った。

大分紡績会社は、大正十一年に富士瓦斯紡績会社と合併し、
同社の大分工場となっていていまに及んでいる。

忠直卿の墓

浄土寺の北門をはいると、すぐ左手に越前宰相松平忠直卿（一
伯）の霊屋が、世間の騒音をよそにひっそりと建っている。

中には忠直卿の墓と愛しよう（妾）お蘭さまの墓と称される
ものと、忠直卿のしょう（妾）腹の子の墓が納めてある。

墓碑銘は、忠直卿のは「逆修西巖院殿相誉蓮友寿位」お蘭さ
まといわれるものは「西貞院殿露月妙昌大姉」子の墓は「春荘
幻華童女」とある。これらの墓は、新古おのおの二基ずつある。
古い方は、大正十四年に境内の南北のすみから住職が掘り出し
たもので、これに「逆修……」とあるところを見ると、忠直卿
が生前に建てたものである。たぶん愛しようの墓を建立するさ
いに同時に建てておいたものだろう。

松平忠直とか一伯とかいっても興味はないが、菊池寛の名作
小説で、映画にもなった「忠直卿行状記」の主人公だといえ、
ああ、あれかと、たいていの人はうなずいてくれる。

徳川家康の孫で、越前七十五万石を領した花形大名だった。

大阪夏の陣で真田幸村の首級をあげるなどの目を奪う働きをし、軍功天下第一と家康からほめられたにもかかわらず、恩賞がきわめて少なかったために、不満を爆発させて狂暴な行状が重なり、ついに豊後に配流となった悲劇の主人公である。

慶安三年（一六五〇年）滝尾の津守の居館で、五十六歳の生涯を閉じた。遺体は幕府から派遣された役人の検視のあと、浄土寺の本堂前庭で火葬にふされた。そのさい火葬の台石にした平らな一枚岩が、いまも「火葬石」と呼ばれて、くり（庫裡）の庭にある。また火葬あとに記念に植えたらしい松が「火葬松」と名づけられ、忠直卿の最期を語っていた。現存する「火葬松」は、一度植えかえられた第二世の松だそうだ。

忠直卿が豊後に配流となるとき、家来はまったく連れてこれなかった。その代わり側女となる女性を数人と、側女の腹に生ませたおくせという童女をともなってきたようだ。この童女はその翌年四歳で死亡した。浄土寺の「幻華童女」の墓がそれだ。もう一つの、お蘭さまの墓といわれる「西貞院」の墓は、忠直卿が豊後に配流になった年に死亡したものだ。

お蘭さまは、忠直卿乱行に関係のある、さまざまの伝説にいろいろとられ、忠直卿最愛の側女と目されている女性だ。ところが郷土史家の研究の結果、墓の主はお蘭さまではないということになってきているようだ。忠直卿をとりまく女性は、お蘭のほかにおむく、おいと、おていという女性がいる。その他、おつな、おきく、おふり、おくめ、おつるなどの名も出てくる。墓の主はこの多くの女性の中のだれかだというのである。

お蘭さま

新しくできた大分民謡「豊後よさら節」の冒頭の文句が「お蘭さまいかにかねつけ　しゃんしゃらめけど…」と、忠直卿が愛しよう（妾）お蘭との哀切のあう瀬をうたっている。側女だから忍びのあう瀬などあるはずはないだろうが、そこは脚色された民謡だからまあいいとして、このごろ市内に「お蘭さま」という菓子も売り出されているし、ちよつとしたお蘭さまブームだ。お蘭さまも現代に呼び戻されてとまどっていることだろう。

ところで、生石の浄土寺で、忠直卿と並んでいる女性の墓が、お蘭さまのものと伝えられているからこそ、忠直・お蘭の愛情のこまやかさも一層美しくいろどられているのに、これが不粋な郷土史家の研究で、別の女性のものだといわれては、ふたりの物語りにつやがなくなる。

困ったことに墓に記された死亡年月から、九年も後に、津守の熊野社にお蘭自筆の願文を納めたという証拠が現われたのである。

それではいったい、墓の女性はだれかと、史家の先生方はいろいろと推理をしているが、決定的な女性は浮かび上がっていない。

久多羅木儀一郎先生は、一伯公伝記に、豊後に連れてきた女性を「お女中方、お蘭どの、おむくどのおていどの、此女中年死去」と記してある文脈からみても、また「西貞院」の墓碑銘が、おていの名にちなんだものらしいことから推しても、墓

の主はおていに違いない、という説をたてている。

忠直卿は、この死んだ女性に、非常に愛情を注いでいたらしく、女性の死後七七日には、追善の歌二十首を草して浄土寺に送っている。

枝あらばまた来る春もあるべきに

華よりもろき人のいのちは

別れ行くあとの日数はつもれども

夢にならではおもかげもみず

我也行く道とは知れどはかなくて

先たつ人をなげくものは

といったような切々たる愛惜の情をうたったものばかりである。しかも自分の逆修の墓までかたわらに建てるなど、よほど愛していた女性なのだ。

しろうと考えだが、熊野社に納めてある願文は、第二のお蘭が納めたのではないか。越前から連れてきた最愛のお蘭に死なれた忠直卿が、その名を忘れかねて顔かたちのよく似た女性をお蘭と名付けて側女とする。その第二のお蘭が何かの機会に熊野社に願文を納めた。ありそうなことではないか。

越前から連れてきた女性や、豊後で生まれた忠直の子は、忠直死後本国に引き揚げさせたが、その中におむく、おいどの名はあるのに、お蘭の名はない。越前からきたお蘭さまはやはり豊後で死んでいる。



オオイタデジタルブックは、大分合同新聞社と学校法人別府大学が、大分の文化振興の一助となることを願って立ち上げたインターネット活用プロジェクト「NAN-NAN（なんなん）」の一環です。

NAN-NAN では、大分の文化と歴史を伝承していくうえで重要な、さまざまな文書や資料をデジタル化して公

開します。そして、読者からの指摘・追加情報を受けながら逐次、改訂して充実発展を図っていきたく願っています。情報があれば、ぜひ NAN-NAN 事務局にお寄せください。

NAN-NAN では、この「大分今昔」以外にもデジタルブック等をホームページで公開しています。インターネットに接続のうえ下のボタンをクリックすると、ホームページが立ち上がります。まずは、クリック！！

デジタルブック版「大分今昔」 第十七章 ●生石かいわい

2007年12月7日初版発行

筆者 渡辺 克己

挿絵 田中 昇（着色：佐藤 克治）

編集 大分合同新聞社

制作 川村正敏／別府大学メディア教育・研究センター 地域連携部

発行 NAN-NAN 事務局

〒870-8605 大分市府内町3-9-15 大分合同新聞社 総合企画部内

© 大分合同新聞社

著者略歴◇渡辺克己

大分県大分市佐賀関町木佐上出身。大正二年生まれ。朝鮮京城で新聞記者。終戦で引き揚げ、大分合同新聞記者。こども新聞、学芸部等の部長を経て調査部長を最後に昭和四十三年定年退職。昭和二十七年から同四十二年まで大分市教育委員、昭和四十三年から同四十八年まで民生児童委員。
郷土史を研究し「大分今昔」「豊後のまがい物散歩」「国東古寺巡礼」「忠直卿狂乱始末」「真説・山弥長者」「豊後の武将と合戦」「ふるさとの野の仏たち」等の著書。